３．大宮市における低出生体重児の運動発達変化

青山　正征*1　　北原　久枝*1
加納　　清*1　　塩野　幸子*2

要　約

低出生体重児の運動発達変化を継時的に評価して，その特徴を分析することを試みた。それによると，低出生体重児の大部分は，むしろ正常児に劣らぬほど抗重力姿勢の発達がよいことが分かった。しかし，出生体重が小さく在胎期間の短いケースでは，発達がかなり遅れることが示された。

はじめに

大宮市における低出生体重児の出生頻度は，約６％弱であり，そのうち出生体重2.0～2.5kgの乳児が80％を占める。前回の調査報告のごとく，出生時合併症，高齢出産，若年出産，既流死産率，SFG率が出生体重1.5～1.9kgの乳児に特に高く，また生後４カ月乳児健診レベルで見ると，出生体重が小さければ小さいほど受診率が悪く総じて出生体重2.0kg未満の乳児に問題が残るように思われた。

今回は，このことを踏まえながら，低出生体重児に関わっている保健婦より受診を勧め，生後４カ月乳児健診時点より継時的にfollow-upしてその運動発達変化を捉えることを試みたので報告する。

研究対象

平成３年１月以後に出生した低出生体重児で未熟児発達調査に協力してくれた43名中，発達チェックが十分なされている16名を対象とした。

研究方法

ボバースの運動発達評価表を用いて，腹臥位，背臥位，坐位，立位と歩行（その他，手，反応があるが今回は省略する）を月齢評価し，それを既に発表してある正常児とリスク児の運動発達変化と比較する。

結　果

１）対象

対象は表１の如く16名であり，その出生状況は表１のとおりである。

２）運動発達変化

① 腹臥位の発達変化（図１）

腹臥位の運動発達変化をみると，大部分がリスク児の発達変化（n2ライン）よりも発達の早い領域に分布しているが□，○，▲，■，△の順に発達が悪いことがわかる。しかし，▲，■は月齢が進むと正常域に入り，△もほぼリスク児のラインに沿うようになることがわかる。□は腹臥位の発達が極端に悪く，問題を残している。

*1大宮市心身障害総合センターひまわり学園　　*2埼玉県大宮保健所

表1　低出生体重児の出生状況

項目 ＼ 出生体重		A 1.0kg未満	B 1.0kg～1.4kg	C 1.5kg～1.9kg	D 2.0kg～2.4kg	E 2.5kg	F 計
1	対象数	0	3	2	11	0	16
2	率(%)	(0)	(18.8)	(12.5)	(68.8)	(0)	(100)
3	出生時合併症有	0	3	1	1	0	5
4	合併症率(%)	(0)	(100)	(50)	(9.1)	(0)	(31.3)
5	高齢出産率(%)	(0)	(66.7)	(0)	(0)	(0)	(12.5)
6	若年出産率(%)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
7	既死産率(%)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
8	既流産率(%)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)	(0)
9	SFG率(%)	(0)	(33)	(50)	(63.6)	(0)	(56.3)

SFG：Small For Gestational Age

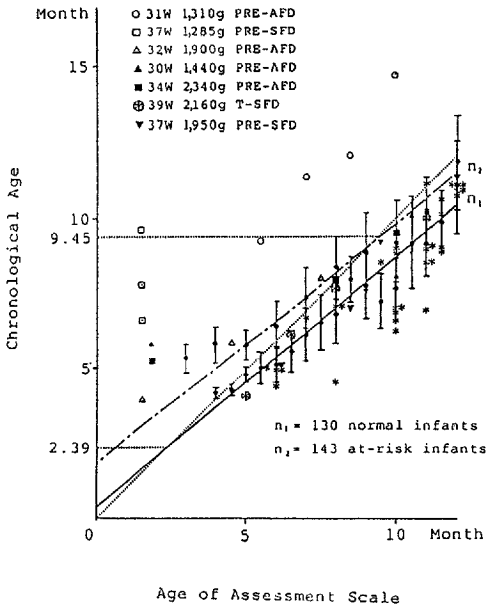

図1　Developmental Change of Prone Position

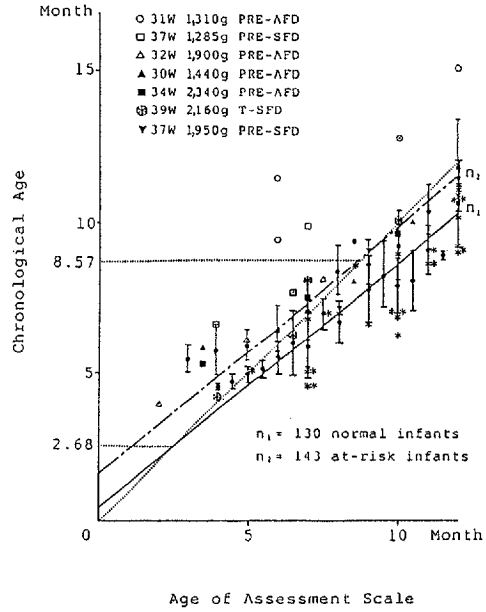

図2　Developmental Change of Supine Position

② 背臥位の発達変化(図2)

腹臥位とほぼ同様であるが，腹臥位よりもやや発達が遅れる傾向にある。しかし，□，○のケースは極端に遅れる傾向にあることがわかるが月齢とともに発達していることがわかる。特に，○のケースは15カ月過ぎに12カ月レベルに達している。

③ 坐位の発達変化(図3)

腹臥位と同様に大部分がリスク児のラインよりも早い領域に入っており，正常児の発達変化(n1ライン)より早いものも相当数ある。□，△，■，△は経過とともにリスク児のライン域に入り，○のケースのみが遅れている。全体的に腹臥位よりも発達が早いと考えられる。

母子愛育会図書室

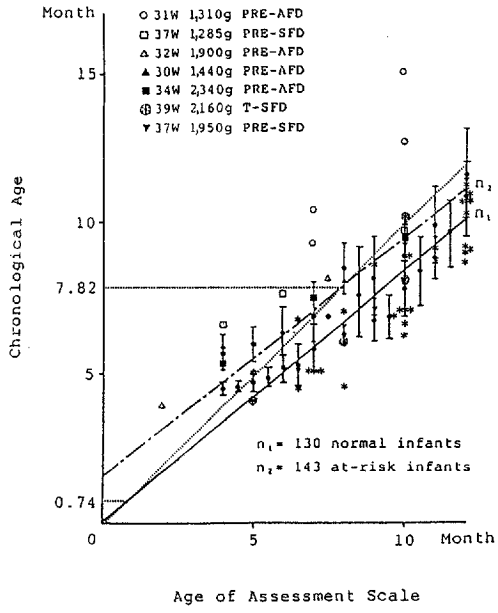

図3　Developmental Change of Sitting Position

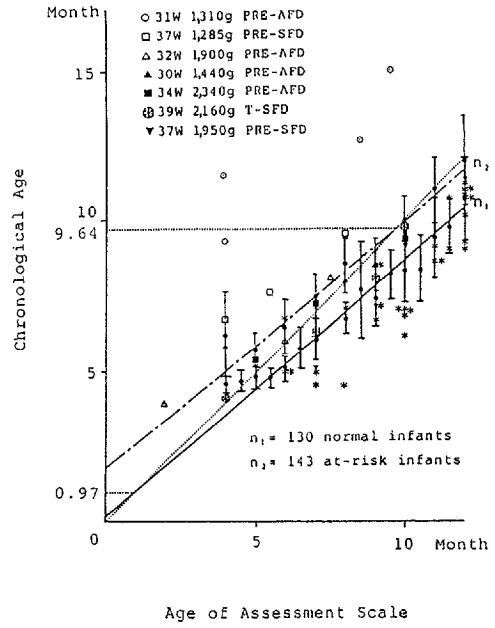

図4　Developmental Change of Standing Postition

④　立位の発達変化(図4)

やはり大部分がリスク児のラインよりも早い領域に入っている。正常児のラインを凌駕しているものはほぼ腹臥位と同様である。▲，△は経過とともに正常域に入り，○，□は遅れている。

考　察

1）出生状況について

前回の出生状況の調査によると，出生時合併症以外，高齢出産率，若年出産率，既流死産率，SFG率は，出生体重1.5～1.9kgの乳児にやや高い傾向があったが，今回の対象例のそれをみると出生時合併症も含めて出生体重の少ない1.0～1.4kgの乳児の方が出生状況に問題があることが分かる。ただSFG率は，出生体重1.5～1.9kgの乳児にやや高いことが窺える。

今回の対象数は，大宮市における低出生体重児の全出生数の10%にも満たないことから，この比較にはかなり無理があることが考えられる。しかし出生体重が小さければ小さいほど出生状況が悪くすることは充分考えられる。

2）運動発達変化について

全体的にみると，低出生体重児の運動発達は，むしろ正常児の平均を上回っているものが相当数みられる。特に，座位，立位の発達，また腹臥位の発達で目覚ましいものが見られ，運動発達の良いものは，むしろ正常児に比べて抗重力姿勢の発達が良いことが考えられる。

一方，遅れている乳児の中でも，時間の経過とともにリスク児と正常児の発達変化の中間領域に入り込み，正常化することが分かる。しかし，○，□のケースは，出生体重も少なく極端に遅れている。特に，□は腹臥位の発達が悪い。○は在胎31週のケースであり，修正するとほぼリスク児のラインに沿うことが考えられるが，なお観察を続けなければならない。このようにしてみると，全体としての発達の良好なものと悪いものとのグループ化の傾向があるのではな

いかと推測される。

今後は，対象数を増やし，発達曲線を解析し，低出生体重児の運動発達変化を更に明確にしたいと考える。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約
低出生体重児の運動発達変化を継時的に評価して,その特徴を分析することを試みた。それによると,低出生体重児の大部分は,むしろ正常児に劣らぬほど抗重力姿勢の発達がよいことが分かった。しかし,出生体重が小さく在胎期間の短いケースでは,発達がかなり遅れることが示された。